

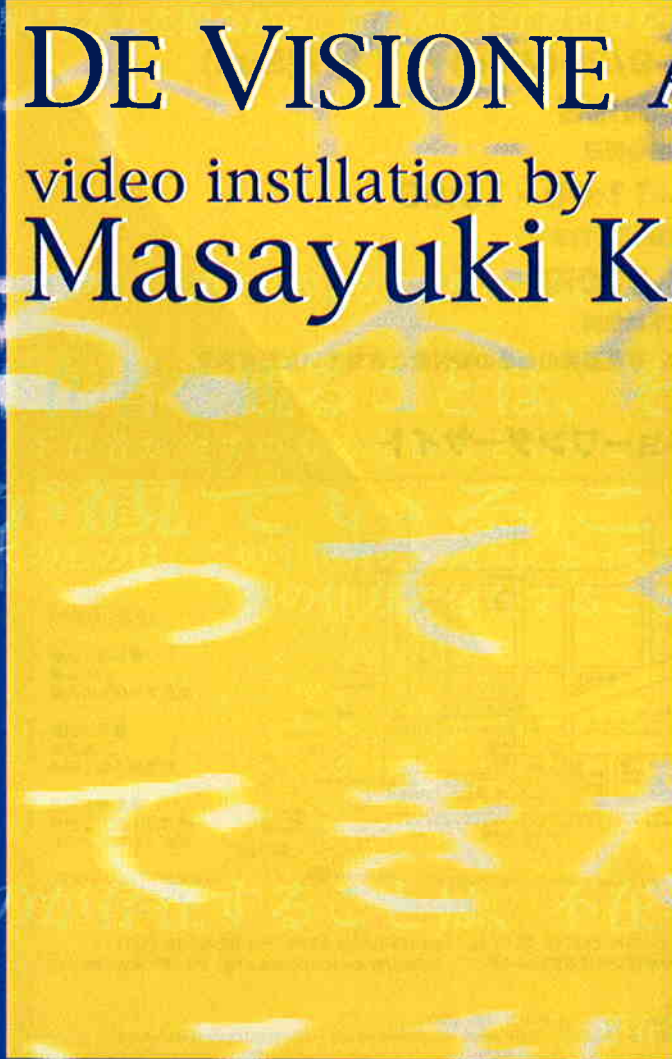
DE VISIONE ABSENTIS 河合 政之

video instllation by

Masayuki Kawai

不在者を観ることについて

ビデオ インスタレーション



において観られる。
いる全てのものによって、
見実的行動において、観られるのである。
なものとして存在している。
存在性としての「観」
完全性を説き明かすことができる。
不在者は同時に、観る主体であり、観られる客体であり、
それ自身を創造する。観ることそのものである。

29.Sep (wed) - 7.Nov 2004 (sun)

テクニカル・コラボレーター：田中廣太郎

●開館時間：11:00~19:00 (入場は閉館30分前まで) ●休館日：月曜日 (祝日の場合は翌日) ●入場料：300yen (中学生以下は無料) *入場料は、事業運営のための寄付金とさせていただきます。
●製作：トーキョーワンダーサイト ●お問い合わせ：トーキョーワンダーサイト tel: 03-5689-5331 / fax: 03-5689-7501 / info@tokyo-ws.org

テキスト：ニコラウス・クザーヌス『神を観ることについて (原題：De Visione Dei)』より

(日本語訳：八巻和彦 (岩波文庫 2001) 英語訳：Jasper Hopkins (The Arthur J. Banning Press 1985))

DE VISIONE ABSENTIS

不在者を観ることについて

video installation by
Masayuki Kawai

ニコラウス・クザーヌスの『神を観ることについて』
および「不在者」概念について

河合 政之

この作品では、ニコラウス・クザーヌスの著作『神を観ることについて』（八巻和彦訳、岩波文庫、2001年）からのテキスト引用が全面的に使用されている。作品内では、クザーヌスのテキストにおいて「神」として表れる主題が、すべて作家によって「不在者」に置換されている。

ここにはまず「神の不在」として現代世界を捉えるという考えがある。また「不在者」という表現には、「不在としての存在（絶対者）」というパラドクスが含意されている。こうして絶対的存在である神（のごとき存在）が不在の内にお君臨しているということが意味されている。

ここでまず第一義的に作家が問題としているのは、メディアと表象によって地球規模で覆い尽くされている現代世界についてである。ここではメディア的な視線＝<観 (visio)>こそがあらゆる関係性を規定しており、イメージ表象＝<像 (imago)>が実効的な価値・権力を持つにいたっている。このような「像としての世界」は、イメージ表象のマッスのな全体性として、あるいは地球規模のメディア＝情報システム（それは個人の内面をも包含する）として、一種の絶対者として君臨しているのだ。この「世界＝像」は、まさに「不在者」として、つまりその存在を否定されたパラドキシカルな絶対者として存在している。そしてそれによって与えられる私たち自身や諸表象の存在もまた「情報」として「不在」の内にあるというパラドクスを本質的に抱え持つ。（なぜなら「情報」「表象」なるものは像に過ぎず、本質的な意味で存在しないからである。）

だがこのように「不在者」のテーゼを立てて思考する時、それは単に情報社会、「世界＝像」についての批判のためのアナロジーとしての機能するのではない。「不在者」をこの「世界＝像」と読むのは、このテーゼのネガティブな側面である。一方不在なる絶対者として措定されている「不在者」という概念は、様々な絶対者として考えることも可能である。すなわちそれは言うまでもなく神でもあり、もしくは超人、歴史、革命、科学的真理あるいは他者といった、あらゆる超越者であるかも知れない。そしてそれらをポジティブに捉え返すとき、「不在者」の措定は絶対者が不在の内に来り立つ（べき）ことを意味しているとも言えよう。すなわち「不在者」のテーゼは不在の内に来るべき絶対者を先取りし、幻視しようとするパラドキシカルな創造・想像の試みであるのかも知れない。

このように考えるとき、現代の世界＝像的状况としての「不在」が、同時にそのままその転覆（あるいは救済）可能性として裏返されることとなる。「不在者」という概念がこのように両義的、パラドキシカルなものとして措定されることで、クザーヌスによる神の<観 (visio)>についての思考は、現代の状況に対する批評的な問いとして、また同時に世界の根源的な変革可能性の指示として、作品の中に再構成されることとなるだろう。

河合 政之 かわい・まさゆき

1972年生。メディア/ビデオアーティスト。

メディア社会をテーマとして、先鋭的な映像に政治や哲学が交錯する独自の作風で、世界15カ国以上の映像祭や展覧会などで作品発表、受賞多数。また国際映像展などのプロジェクトの企画、芸術、思想分野での執筆など、その多彩な活動が世界的に注目されている。



■ 会期---9/29(Wed) ~ 11/7(Sun)

■ 休館日-月曜日

*祝日の場合は翌日

■ 時間---11:00 - 19:00

*入場は閉館30分前まで

■ 入場料-300円

*中学生以下は無料

*入場料は、事業運営のための寄付金とさせていただきます。

■ 会場

トーキョーワンダーサイト

[交通のご案内]

- お茶ノ水駅
JR中央線
東京メトロ丸の内線
- 水道橋駅
JR総武線
都営地下鉄三田線
- 本郷三丁目
都営地下鉄大江戸線
東京メトロ丸の内線

*各駅よりそれぞれ徒歩7分

TEL 03-5689-5331 FAX 03-5689-7501
〒113-0033 東京都文京区本郷2-4-16
http://www.tokyo-ws.org info@tokyo-ws.org

Tokyo Wonder Site
2-4-16 Hongo Bukyo - ku Tokyo, JAPAN 113-0033
Tel:03-5689-5331 Fax:03-5689-7501 Email: info@tokyo-ws.org URL: http://www.tokyo-ws.org

Access:
Tokyo Wonder Site is a seven-minute walk from JR Ochanomizu station: Cross Ochanomizu-bashi and the first pedestrian crossing, turn left (west) and walk on Sotobori-dori Street, and go past Tokyo Medical College, Juntendo Hospital and Juntendo University. Turn right at the corner of Century Tower. The Site is located at the first intersection on left. The Site is also a seven-minute walk from JR Suidobashi station, Ochanomizu station and Hongo Sanchohome station for Marunouchi Line.

わたしたちの目の前にある世界は、いつも、まったく何事もなかったかのように既知のものとして、ここにある。私たちは、日常、その当たり前の世界を驚愕の世界として捉えることはない。私たちにとって、何かが失われたとき、私を取り巻く事柄はあまりにも私にとって重要なものだらけなのであることに気づかされる。目の前にある世界としか呼びようのないものは、私たちが常に新しく知覚し、構築しているものに他ならないが、実際には、この場所を取り巻く出来事は、それによって構築されてゆく私という現象と、何の根拠もなくたち現れては、消えてゆくかのように感じられる。

ひとは私と世界との関係を何かにによって記述することでしか埋められないものを持ち続けている。とくに現代という消費社会のような海を漂うとき、ひとは、何とかしてこの世界と自分を記述する方法を探し続ける。世界とひととの構造は、その記述を通してしか成り立たないからだ。この出来事や物事そのものより映像とイメージによって構築され支配されている現代においては、その世界に対する記述の方法として、そもそも身近な映像そのものをその記述のメディアとすることは当然のなりゆきだろう。現代のアートの作品の多くがビデオを通じた作品となっていることは当然の成り行きに違いない。そして、映像を用いた作品は、このあたりまでの日常の世界に、小さな不連続な亀裂を作りながら、記述を始める。しかし、その多くのビデオによる作品は、依然として私小説的な私探しの記録に過ぎない。映像とイメージによってひとがいかに拘束されているかの認識に基づいたイメージの問題に、はっきりとしたスタンスがとりえていないゆえだろう。

河合政之は、そのメディアと映像とイメージが構築する虚構の世界の成立について、私の出来事について記述するのではなく、この世界とイメージの成り立ち、偶像にとりかまされた私たちの構造をあらわにしようとする。彼がメディアによって支配された世界にありながら、メディアとしてのビデオで批判的に構築することでしか提出せざるを得ないというパラドクスを背負い込みながら、単なる批判が批判としての力を持ち得ないように、彼はその先の世界そのものの成立を、批評と言ふものの先に成立させようとしている。その彼のぎりぎりのポジションは、戦闘的、挑発的であり続けるしかないだろう。

ビデオはこれからも、私的な出来事を記述することをやめることはないだろう。しかし、その記述の生み出す日常との小さな不連続な亀裂の先はいつかどこへ向かおうとしているのか。ビデオというメディアによる作品が多く作られるなか、河合政之の作品によって、改めてそのビデオというメディアによる作品が依拠する地平とその向かう方向を考えてみたい。

今村有策（トーキョーワンダーサイト館長/東京都参与）

■ 関連イベント

オープニングレセプション.....9/28(Tue) 18:00~

レクチャー & 対談.....9/29(Wed) 19:00~

「クザーヌスと現代」八巻和彦（早稲田大学教授/中世哲学研究者）
及び、対談：河合政之×八巻和彦